

最後の授業で取り上げた作品「ひかりのまち」の第一章を取り上げたい。この章だけでセクシュアリティの要素は存分に散りばめられていると思う。キーワードはマヨネーズと星である。マヨネーズの形状は男子の性器を象徴している。もっと言えば、最後に野津が言うようにマヨネーズの口は星である。これが何を意味するか？ 私達は流れ星に願い事をするように、星は「願い・望み」もっと単純に言えば「欲望・欲求」を象徴するものであろう。したがってマヨネーズは何か欲求を爆発させる代理物としても登場していることに触れておきたい。

23p、野津のフリーターの友人は、親に実家に帰れ・公務員の資格を取らなければ絶縁だと言われ、自分の力ではどうにもならないこの無力感をひかりのまちの住民にぶつけ、マヨネーズを射精の如く噴射させている。ここで、人間には、性的欲求と社会的欲求があり、性的欲求はある程度は自分で処理できるものであるが社会的欲求は概して自分ではどうにもならないものである。社会的欲求はよく代理的に、一時的に発散させることで処理されている。この友人は今の自分ではどうにもできないという社会的欲求不満に悩まされている。その爆発が、代理的に、性的欲求のはけ口であり性器の象徴である、口が星型のマヨネーズを勢いよく噴射させることに表れたのではないだろうか。その後、33p、その友人がタクシーの上で野津の話を聞いているシーンでは、その友人の性器部分がちょうど、タクシーの電灯と重なっている。そしてその電灯は、欲求の象徴である星である。さらに、39pで明らかになるのだが、その友人がタクシーの天井にマヨネーズで描いた絵も、星である。自分の満たされない欲求をタクシーの天井に、欲求のはけ口の象徴・性器の象徴であるマヨネーズを用いて描いたのだ。この一連の連鎖は非常に興味深い。

そしてその後、野津一同は流れ星を途方もなく追いかける。一同各々が抱える欲求はおそらく社会的欲求であろうが、欲求の象徴である星、特に願い事を叶えてくれるという流れ星を追いかけることで、代理的・一時的に発散をしようとしているように思える。それは追いかけながら友人が話した言葉「昔の俺はさあ、未来はもっとキラキラしてるもんとってたんよ。だのにいつの間にか大人になっちゃってたのなー」に表れているのではないだろうか。

話はマヨネーズをめぐる話に戻るが、このマヨネーズは次の日、野津の手に戻る。野津は、性的欲求のはけ口であり性器の象徴である、口が星型のマヨネーズを手にしたのだ。これを手にした野津は、39p、さよに対し、「今日の取材はもう終わりにして、俺んち帰ってセックスしよう。」と言っている。「マヨネーズの口って星の形をしてるんだよ・・・それだけだぁ！！」「そういえば僕は流れ星に3回願い事が出来たことがなくて昔は相当やきもきしたものだけど、どうにか今までやってこれたよ。これからもどうにかやっていこう。」これらの言葉は、「自分も社会的欲求不満にずっと悩んできたが、何とか代理的な発散(性的発散も含む)・欲求の再起を繰り返しながらもやってきた。その欲求は満たされることはないだろうけれど、どうにかしてこれからもやっていこう」という野津の内面を表しているが、これは私達人間皆にも当てはまることを野津が見事に代弁してくれているのではないだろうか。私達が普段気付かずにいることを表現してくれたのではないだろうか。私

はそう思えてならない。

「野津くんち、行こっか？」「うん」彼らはそうしてこれからの日々を、まるで現代に生きる私達を表象するかのように生きてゆくことを匂わせながら消えてゆくのである。